

秋水の夏

しんいちろう



Shin-ichiro Miyoshi

三吉眞二郎



竹書房

秋水の夏

三吉眞一郎

竹書房

三吉眞一郎

みよし しんいちろう

1951年、静岡県静岡市生まれ。2011年、広告代理店アサツーディ・ケイを定年退職し、作家活動に入る。2013年11月、処女作『翳りの城』を発表。その斬新な戦国時代小説は、多くの読者や文芸担当書店員を驚かせ、「第3回歴史時代作家クラブ賞」新人賞にノミネートされる。神奈川県横浜市金沢区在住のため、本作（『秋水の夏』）執筆にあたっては、戦時中の地図を頼りに横須賀近辺を取材、「秋水」の飛行現場を探しあてて。デビュー第二作である本作は、青年士官たちの峻烈な夏を、実話をベースに小説化したものである。

秋水の夏

しゅうすい なつ

二〇一四年八月二日 初版第二刷発行

著者……………三吉眞一郎

発行者……………後藤明信

発行所……………株式会社竹書房

東京都千代田区飯田橋二の七の三

郵便番号……………一〇二一〇〇七二

電話……………〇三―三六四―二五七六（代表）

〇三―三三三―四一三三三（編集）

<http://www.takeshobo.co.jp>

振替……………〇〇七〇―一七九二〇

印刷所……………凸版印刷株式会社

無断転載・複製を禁じます。

定価はカバーに表示してあります。

落丁・乱丁の場合は当社にてお取りかえいたします。

© Shin-ichiro Miyoshi 2014

Printed in Japan

ISBN978-4-8124-8844-7 C0093

目次

序章		004
第一章	辭令	 012
第二章	邂逅	 047
第三章	焦燥	 087
第四章	衝擊	 118
第五章	死線	 159
第六章	激鬪	 190
第七章	飛翔	 228
終章		269

目次

序章		004	
第一章	辭令		012
第二章	邂逅		047
第三章	焦燥		087
第四章	衝擊		118
第五章	死線		159
第六章	激鬪		190
第七章	飛翔		228
終章		269	

秋水の夏

三吉眞一郎

序章

一

平成八年（一九九六年）九月

横須賀。

この文字を眼にした瞬間、私の心は俄かに震えた。永い間、心の底に眠り続けていた、いや、封印させていた激情が微かな振幅を伴って目覚めてゆく。縁側に座ったまま、私は暫くの間、手元の書面を眺め続けていた。

紺碧こんぺきの色をなす晩夏の空に流れる雲間から一条の陽光が射し込み、手元の白い書面に印刷された墨文字を照らす。私の姪子めいごにあたる加奈子かなこから送られた結婚式の招待状に記された文字だった。横須賀で式を挙げるので、夫婦ふたりでは是非来てほしいと、万年筆で書かれた紺色の丁寧な文字で一筆が添えられていた。

横須賀。

昭和二十年夏、太平洋戦争が終わって以来、私は群馬県の実家、桐生きりゆうに引っ込み、東京に出ることはあっても、この街にまで赴くおもむことは決してしなかった。横須賀は、それほど私の中では遠い、いや、封印してきた存在だった。

二

晴れやかな仲秋ちゆうしゅうの日曜日だった。横須賀Pホテルの最上階で行なわれた挙式と披露宴ひろうえんが終わり、来賓らいひんたちが楽しみに語らいながらエレベーターホールに向かう中で、私は独り披露宴の行なわれた会場の窓辺に寄った。先刻から気になっていた、大きなガラス窓の向こうに展ひらがる北側の景色を見るためだった。

見下ろす眼下には、休日の午後をホテル正面の大型スパーに入ろうと並ぶ長い車列と、その先に柔らかな光を受けて煌きらめく横須賀港が見渡せた。明灰色に塗装された数隻の海上自衛隊艦艇かんていが錨いかりを降ろし、その脇には潜水艦も一隻、巨鯨のような黒い船体の半身を、やや傾いた西陽に照り返させている。だが、私の眼は、更に遠くの一点に、何かを探し求めるかのように彷徨さまよった。

「いい式だったわねえ」

妻の葉子は私の脇に立つと、窓の外を見つめながら言った。

「加奈ちゃん、綺麗でしたわね。ほんとに良かったわ」

妻の臉には、可憐だった加奈子の晴れやかな花嫁姿が残っているようだ。私たちの間には子どもがいなかった。それ故、私の一番年下の妹・節子の末娘、加奈子の存在は、妻にとつては我が娘、と言うよりも孫娘のように可愛い存在だった。加奈子の結婚は、彼女にとつても大きな喜びだったのだ。然し今、窓辺から遠くの一点を見つめる、まったくそれとは異なった私の心情を、妻は察していたに違いない。

「ああ……。綺麗だったね」

私は、遠くを見つめたまま応えた。

「ご主人になる方も、とっても優しそうな人で安心しましたわ。少しおとなしただけど、かえってその方がいいのよね。加奈ちゃん、しっかりしているから」

妻は小声で囁くように言いながら、窓の外に、私と同じ方向を見た。そして、ふと間を置くと、こう言った。

「追浜に、お寄りになりますか……」

私の咽喉が鳴った。妻からの、思いがけない言葉。だが、この窓辺から一点を見つめる私の心は、確かにもう、決まっていたのだ。

「いいのか……?」

妻が、静かに頷くのがわかった。

追浜と呼ばれる小さな町は、横須賀から五キロほど東京方向に戻る、今は小さな漁港と、東京、横浜のベッドタウンとして山側に開けた住宅地、そして、東京湾に面する海側には巨大な自動車工場とその関連施設を持つ町だった。

然し、この町こそかつて、太平洋戦争中、日本海軍航空隊基地と航空技術廠が存在し、日本海軍航空隊の一大拠点としてその存在を知らない者はない町だった。そして私は、ここで昭和二十年の、あの夏を過ごしたのだ。

三

京浜急行の追浜駅に妻とともに降り立った私は、その変貌に愕然とした。線路と直角に、まっすぐ東に向かう道の幅は、当時より狭くなったか。商店街のアーケードと高い建物に埋め尽くされ、かつて遮る物もなく広々と見えたこの道を、両側から圧しているように思われた。それがこの道を、当時よりも狭く錯覚させているのか。

「この道だ。ここをまっすぐに行けば……確か」

追浜の変貌ぶりは、私の記憶に一抹の躊躇ちゆうちよと微かな眩暈めまいさえ覚えさせた。だが、間違いない、駅前からまっすぐに伸びた、この道だった。私は、変容した大通りをゆっくりと歩き始めていた。妻は、黙したまま、私の後から歩いた。

「もしよかったら、その辺りの喫茶店で休んでいてくれ。一時間以内に戻れると思う」

婚礼用の留袖とめどてを着た妻の負担が気になり、振り返ると、私は言った。が、葉子は黙って小さく笑った。そして、

「ちよっと、お待ちになってね」

そう言くと、ちよど通りかかった商店街の花屋で、小さな花束をふたつ買い求めていた。白菊ぎくの花束だった。私はその場に立ち尽くしたまま何も言えず、再び前を向くと、ただ遠い記憶を辿りながら歩き始めた。

大通りを横切るように川が流れ、コンクリートの橋が架かっている。鷹取川たかとりがわだった。私は、橋のたもとから下を覗き込む。川はあった。水量も豊かだった。だが、その水は濁り、どぶ川のよに澱よどんでいる。一瞬眉間みけんに翳かげりを作った私は、川沿いに歩き始める。葉子は黙って、それに従って歩いた。鷹取川に並んだ道は、東に向かってゆく。歩くほどに川幅は広まり、水の濁りもなくなっていた。水面に対岸の木立が影を落とす。

「きれいな川だった、この川は」

私はひとり、己れに言い聞かせるように呟いた。春の季節、兩岸を覆った満開の桜並木が記憶の底に鮮やかに浮かんでいた。

やがて川の先の景色が広がり、眼前にこんもりと緑に包まれた小山が顕れた。緑に染まる山は、入江のような海面の上に浮かんでいる。野島だ……。口元から呟きが漏れた。周囲を見廻す。名勝、金沢八景のひとつ、野島の夕照として詠まれたその美しい景色に、もはや昔日の面影はない。同時に自分の胸の中で、あの夏の景色が、音を立てて崩れてゆく気がした。

来るべきではなかったか……？ 今、引き返すべきか？ そう迷いながらも私の足は、再び進み始めていた。

やがて、入江に沿って伸びる道の彼方に、一点を捉えた。道の右手には学校らしい建物とグラウンドが広がっている。その先は、公園か？ そして、道が曲がった先に……。私は、生唾を呑んだ。乾いた咽喉が鳴った。私は、道の屈折部に立った。額から汗が流れる。空を見上げた。雲ひとつない紺碧の空だった。その大空に或る幻影を追うように、ゆつくりと視線を巡らせた。頭上に大きな弧を描いた私の視線は、やがてゆつくりとその視界を下げながら、一点で停まった。

「あそこだ……」

呟くと私は、ふたたび歩き始めた。いや、駆け足になっていた。私の背後から、大型のトレ

ラーがスピードも緩めずに追い抜いてゆく。道の屈折部は二股に分かれ、一方が右手グラウンドの脇へと伸びていた。ふたたび私の額から、汗が噴き出す。息が切れた。この屈折部から陸側に百メートル。その位置に私の視線は釘付けとなった。

「そこだ……」

曲がり角に立った私は、独り呟いた。木立に囲まれ、運動公園になっているグラウンド。休日の午後、地元の少年野球チームなのだろうか、試合をしている。掛け声が響く。私はもう一度、確認するように空を見上げた。南の方角の虚空から、ゆっくりと視線を右廻りに移してゆく。北の空から、ゆっくりと東へ……。やがてその視線が、眼の前のグラウンドで止まった。もう一度、唾を呑む。

「間違いない……。そこだ」

少年たちが試合をしているグラウンド。たった今、二塁ベースに滑り込んだ選手を、赤茶色の土埃が包む。立ち昇る土煙……。あの日も見た……。

かつてここに、間違はなくひとつの忘れられた歴史があり、喪^{うしな}われた事実があり、そして私の若く、苛^か烈な日々がそこに在った。

「暑い夏だった……」

誰に言うともなしに、言葉が漏れた。その時。

一瞬、眼の端に翳りが射したような気がして、私は顔を上げた。その眼に、鳥なのか黒い影が翔んだ。影はゆっくりと、大きく頭上を旋回した。

「秋水……」

私は、眩いていた。

第一章 辞令

一

昭和十九年（一九四四年）八月 日本海

その日、日本海は真夏の空を映すかのように、どこまでも蒼く照り輝いていた。海軍零式輸送機の、大柄だが脆弱な機体は、絶え間なく小刻みな振動を繰り返している。

「十時方向に積乱雲……迂回する。高度上げえ」

前方から、エンジン音に掻き消されがちな機長の声が聞こえた。私は、ぼんやりと機体の側面に設けられた窓の外を見ていた。

「高度二千に上げます」

副操の緊張した声が聞こえた。機体は、ゆっくりと上昇してゆくと、大きく上下に揺れた。思わず私は、窓の上の手摺を掴んでいた。右に旋回した零式輸送機の暗緑色に塗装された翼が、真夏の陽光を反射して私の眼を幻惑する。だが私の胸中は、その光のまばゆさとは裏腹に、途轍も

なく大きな不安に押し潰されそうだった。

海軍大村航空隊の分遣隊である元山航空隊で、私たち海軍十三期飛行専修予備学生の十六名が、その奇妙な辞令を受け取ったのは、昭和十九年八月十日のことだった。

「Me 163に充つ」

辞令は、ただその一文だけだった。

東朝鮮湾に面した朝鮮半島北部沿岸の江原道元山に拠点を置く海軍元山分遣隊で、九三式中間練習機による基礎教程から九六艦戦、そして零式艦上戦闘機による戦闘機操縦訓練を受け、二ヶ月の繰り上げ卒業をさせられた直後、私たちはこの奇妙な辞令を受け取ったのだ。当然ながら、私たちに実戦経験などある筈もなく、飛行時間は、全員二百から二百二十時間程度。前線に出られる、ぎりぎりの飛行経験時間だった。辞令電文の発信元は、海軍航空本部。通常、海軍の辞令は人事局から発令されるべきものだった。然も、この辞令文の意味を誰ひとり解説出来ない。分隊長に訊いても、返事は同じだった。

「俺にも判らん。とにかく、横空へ行け」

横空とは、神奈川県横須賀にある海軍横須賀航空隊。海軍航空隊の中でも、最も由緒ある航空隊だ。着任指定日までは、九日間のゆとりがあった。

軍人の移動に際しては、あらゆる交通手段が優先的に配慮された。それは、私のような新任で